

山形大学人文社会科学部の人材育成と地域貢献活動の改善に係るアドバイザーボード
平成 30 年度活動報告（まとめ）

平成 30 年 12 月 25 日（火）第 3 回委員会開催（10:30-12:00）

国際交流、入試、修学状況、就職状況の 4 点について、7 月に送付いただいた資料に基づいて学部から説明の後、質疑応答があった。

国際交流については、山形大学と人文社会科学部内での留学の仕組みが異なっている点やカリキュラムの特色について、外部の委員が全容を理解することは必ずしも容易ではないことがわかった。たとえば大学間交流協定と学部の協定、学部の授業を使って海外に行くことと長期留学の仕組みの違いなど、外部には大変にわかりにくい。当事者である学生や保護者が理解できていれば済む話とお考えであれば構わない。しかし、後述の高大接続・入試改革とも関連して、山形大学や人文社会科学部がどのような人材を育てようと考え、そのためにどのような外国語教育を実施し、留学の制度をどう位置づけているのかは、入学しようとする者だけではなく地域社会にとっても大変に関心のある情報のように思われる。卒業生を迎えようとする企業や自治体にとっても同様であろう。もう少しわかりやすい説明をお願いしたい。

入試については、平成 31 年度入試から、AO 入試やセンター試験を課す推薦入試の導入など、平成 33 年度からの高大接続・入試改革に先立って改革を進めていることが報告された。平成 33 年度からの外国語の試験の方法については検討中とのことであったが、大学入試は高校教育への影響が大きいことから、ぜひ改革に前向きに取り組んでほしいとの要望があった。

修学状況については、GPA の分布などの説明が興味深かった。追跡的な分析ではないので単純な比較はできないが、1 年次から 4 年次に向けて 3.01 以上の上位者が減っていくのに、3.0 以下の者が反比例するように増え、2.0 以下の下位の者も増えていくように見えるはどうしてなのだろう。入学年度によって学生の能力に大きな変化があるとは考えにくい。GPA や成績は、単純に学生の能力だけではなく、教える側の方法や評価基準にもよるだろうが、1 年次には甘く、年度が進むにつれて厳しくなるのであれば、その理由を知りたい。一方で、1 年次に問題を抱えた学生については、継続的に支援を続けてほしいとの意見もあった。是非、追跡的に分析して、教育方法や入試方法の改善などにもつなげてほしい。

就職状況については、昨年春には山形県内就職（他県出身者でも）が少し増えたが、今年は少ない見込みであることが報告された。原因の一つは全国的な人手不足で就職する場所も多岐にわたったとの説明であった。また、従来は公務員に次いで多かった金融機関への希望が若干減少する傾向のあることも指摘された。県内への就職については、地元企業や自治体と大学が一体となって取り組む必要があるという点で委員の認識が一致した。

まとめとして、今回は、外部試験導入など、入試制度改革でも話題になっていることから、留学や外国語教育に質疑や意見が集中した。ちょうど改革が進行中のことでもあり、学部として開示に至らない情報も多いと推察されるが、人文社会科学部としても山形大学全体としても、高大接続・入試改革によって、どのように改革しようとしているのかが社会に（地元にも）伝わってこないように思われる。たとえば、山形県内の自治体が国際化に関して東京の大学と連携するというニュースは、広報だけの問題ではないのかもしれないが、少し残念に思われた。人文社会科学部の皆様には、今後なお一層の活躍を期待している。